8月11日　ヨハネによる福音書7章40～52節
「メシアはどこで生まれたのか」

メシアがどこで生まれるのか、それはダビデ王の出生地であるベツレヘムであると理解されていました。一方でイエス様の出身地がガリラヤのナザレで、ガリラヤのことを田舎であると軽く見てイエス様を受け入れることが出来ない人々の間違いが、今日の個所では浮き彫りになっています。異邦人も多く住むガリラヤ地方からはユダヤ人の救い主であるキリストは出てこない、だからイエスという人物はメシアなどではないと思われたのです。

実際にガリラヤの位置を地図で見てみると、都であるエルサレムから遠く離れていて、ユダヤ人と犬猿の仲であったサマリア人の土地「サマリア」よりもなお北にガリラヤはありました。異邦人が多く暮らす、旧約聖書にもあまり記されていないような土地であったガリラヤの出身であることによって、イエス様がメシアであると信じられなかったのです。彼らは「神様の言葉を守り続ける、純粋なユダヤ人だけが救われる」と信じていた人たちなのでしょう。その頑なになった頭ではイエス様のことを受け入れることができなかったようです。

このように、今日の個所では人間的な都合やおもいによって真理を理解できない人々の姿が示されていました。一方で、イエス様によって多くのことを教えられている私たちは、そのような人間的な都合ではなく、神様のみ心こそが正しいと信じ、神様の正しさと神様の平和を実現することこそが正しいことを知っています。誰かを差別するような人間的な業ではなく、誰をも招く神様の業を行うことこそが、私たちが行うべき業であると教えられています。その業を実現するための力を、私たちはイエス様から与えられているのです。

私たちの目の前には、多くの人がいます。どこで生まれた、どんな言葉を話す、どんな見た目である、そんな違いはありますが、全て神様の前では平等にただの１人の人であります。その一人一人を、神様が愛する一人であると認めて愛する、それが私たちがなすべき隣人愛の業なのです。

イエス様がどこで生まれたのか、当時のユダヤ人たちにとっては重要だったのかもしれません。メシアであることの証しとして、人々がイエス様への信仰に至るためにも、重要なことだったのでしょう。だからこそ、福音書を執筆した記者たちはそのことを強調して、イエス様がメシアとして預言された人物であることを伝えています。ただ、イエス様の御言葉を理解した私たちにとってはもはや、「メシアがどこで生まれたのか」はそこまで大きな意味は持ちません。ベツレヘムもナザレも、エルサレムもこの日本も、全てが等しく神様の御心のもとにあることが、イエス様によって教えられているのです。

だからこそ私たちは、どんな場所でもどんな人に対しても、時がよくても悪くても、御言葉を証しし続けることができるのです。私たちが接する一人一人が、神様が愛している一人一人である、隣人も、私たちも、神様の愛の中で生きている、その恵みに支えられながら、今週一週間の歩みを、これからの歩みを共に進めていきましょう。

今日の説教箇所：ヨハネによる福音書 7 章 40～52 節

- 40:この言葉を聞いて、群衆の中には、「この人は、本当にあの預言者だ」と言う者や、「この人はメシアだ」と言う者がいたが、このように言う者もいた。「メシアがガリラヤなどから出るだろうか。メシアはダビデの子孫で、ダビデのいた村ベツレヘムから出ると、聖書に書いてあるではないか。」こうして、イエスのことで群衆の間に対立が生じた。その中にはイエスを捕らえようと思う者もいたが、手をかける者はなかった。さて、祭司長たちやファリサイ派の人々は、下役たちが戻って来たとき、「どうして、あの男を連れて来なかったのか」と言った。下役たちは、「今まで、あの人のように話した人はいません」と答えた。すると、ファリサイ派の人々は言った。「お前たちまでも惑わされたのか。議員やファリサイ派の人々の中に、あの男を信じた者がいるだろうか。だが、律法を知らないこの群衆は、呪われている。」
- 50:彼らの中の一人で、以前イエスを訪ねたことのあるニコデモが言った。「我々の律法によれば、まず本人から事情を聞き、何をしたかを確かめたうえでなければ、判決を下してはならないことになっているではないか。」彼らは答えて言った。「あなたもガリラヤ出身なのか。よく調べてみなさい。ガリラヤからは預言者が出ないことが分かる。」